

21 世紀の大阪にふさわしい国際博覧会とは

西山哲郎

スポーツ・健康と地域社会研究班
関西大学人間健康学部教授

2018 年 11 月 23 日、パリで行われた博覧会国際事務局（BIE）総会において、大阪で再び「万博」が開催されることになった。前回、1970 年の大阪万博は、日本ではじめて開催された BIE 認定の国際博覧会であり、約 6,400 万人という記録的な延べ来場者数を記録したこともあって、同時代を生きた人々に強い印象を残している。しかし、それから半世紀以上たち、世紀末の博覧会乱立時代を経験したあとのわれわれにとって、「万博」の魅力は、正直さほど大きなものではなくなくなってしまった。

とはいえ、国際博覧会という大型イベントは、いまや日本の一地方都市となってしまった大阪にとって、見過ごしにできないインパクトを秘めている。そのインパクトが願わくばネガティブなものにならないよう、大阪に住む人々にできれば好影響を及ぼすものにできるよう、ここで押さえるべきポイントを考えてみたい。

そこでまず「万博」、国際博覧会とは何なのか、その歴史を振り返ってみる。大半の日本人にとって、それは依然として 1970 年に開催された「日本万博博覧会」を想起させるものだろう。さほど昔でもない、2005 年には愛知県でも BIE 認定の国際博覧会「愛知万博」が開催されたが、リピーターとなった地元住人を除けば、そのイメージは希薄かもしれない。あるいは、1985 年の筑波「科学博」や 1990 年の大阪「花博」を思い出す人もいるかもしれないが、1975 年の沖縄「海洋博」を含めたこれら三つの博覧会は、BIE の開催承認を得たとはいえ、規格としては前二者より落ちる特別博として位置づけられている。

次に日本を離れ、国際博覧会の起源を探ると、それはフランスに求めることができる。実際、今でも国際博覧会事務局はフランスにあって、どこで開催するかも、パリで行われる総会で決議されるのが通例となっている。

もっとも、博覧会というより産業見本市の起源はフランスではなく、18 世紀のイギリスで、王立美術工業振興会によって 1761 年にロンドンで行われたものといわれている（ギブニー 1994）。国際博覧会も第一回はロンドンで 1851 年に行われているし、フランス（パリ）で開催されたのは 1853 年のアメリカ（ニューヨーク）より後の 1855 年になる。それでもここでフラ

ンスに博覧会の起源があるというのは、単なる見本市ではなく、世界中から集められた物品によって人類の叡智を一望しようという博覧会の発想が、彼の国が生んだ「百科全書派」の思想に由来するからである。1751年より「百科全書派」が目指したのは、人類の知恵や知識を結集し、万人に公開する百科事典を完成させることであった。博覧会には、その彼らの思想を書かれた文字でなく物品の集積によって実現しようという側面が認められる（吉見 1992）。

そのフランスにおいて、博覧会が最初に開催されたのはフランス革命が起こった直後、1791年のことだった（ギブニー 1994）。このイベントは、先行したイギリスの事例にならって産業見本市としての性格が強かったようだが、同時にそこには民主革命の達成を背景に〈知の革新〉を実現しようとの意欲が込められていた。フランスにおいて、あるいは大陸のヨーロッパにおいて、それまで工芸の技術は王侯貴族が自らの権威を高め、財をなすため独占したいものであり、ギルドという職人組合のメンバーに秘匿されるものだった。実用的な知識や技術を一部の人間で独占するのではなく、皆で共有してさらに良いものを作り、社会全体で経済的な発展を目指そうとする、そうした民主的な知のあり方を博覧会は提案するものだった。

そうしてはじまった博覧会は、1851年のロンドンで国際博覧会として飛躍を遂げることになる。当時はまだBIEは存在せず、各国が勝手に博覧会を開催することができた時代だが、ガラス張り鉄骨建築の「水晶宮」で名をはせたロンドン万博は、同時に旅行代理店による団体割引のパック旅行が普及したイベントとしても知られている（本城 1996）。そのロンドン万博（1851）以降、博覧会は次の5つの目的をもったイベントとして発展していく。

- ① 名産品や工芸品の競（共）進会や物産展
- ② 先進技術の展示会
- ③ 国家の威信を発揚する祭典
- ④ 都市開発の機会（未来の都市、未来の生活を提案する機会）
- ⑤ 世界の叡智を集積し、一望させる機会

この5つの目的のうち、最初の4つは園田英弘がまとめたものだが（吉田 1986：5）、4つ目の（ ）のなかは、BIEの公式サイトで示されている開催目的を参照して今回補足した。また、5つ目の目的は前述の理由から拙稿で加筆したものであるが、1970年の大阪万博が国立民族学博物館を残したことを想起するなら、ご理解いただけるものと思う。

国際博覧会が、このように発展していく過程では、フランス革命の守護者ナポレオンの甥で、自身もフランス皇帝となったナポレオン三世の貢献があった。ナポレオン三世と皇后ウジェーヌは、国威高揚と皇位の保証を博覧会に期待したが、同時にフランスの製品、それも特に香水や宝飾品といった奢侈物品を世界的なブランドにするにも利用したと伝えられている。1970年の大阪万博も当時の日本の電器産業を世界に知らしめる役割を期待されていたが、同じことは

2010年の上海万博にもいえるだろう。要するに、①～③の開催目的は、これまでの万博においてひとつに融合したかたちで展開されてきた。

また、4つ目の都市開発の機会というのは、現在もBIEの公式サイトに開催目的として掲げられているが、千里ニュータウンの開発とセットになっていた1970年の大阪万博は、その典型例（あるいは限定的ながら成功例）であった。ただし1975年の沖縄海洋博と1985年の筑波科学博では、万博を利用した開発は失敗に終わったと評されており（吉見 2005）、逆に2005年の愛知万博では、ニュータウン計画を断念することで致命的な失敗を回避したことは、2025年の開催に向けて重要な教訓となるだろう（町村・吉見 2005）。他方、1990年の花と緑の博覧会は、バブル景気を背景に多数の来場者（約2,300万人）を集め、興行的には失敗といえないまでも、結局、正負どちらにしてもレガシー的なものは残せなかったと認めざるをえない。

BIEが掲げるような理念を欠いた、興行的な成功や景気の高揚を目的とした博覧会は、1990年だけではなく、その前後に日本国内で乱立した内国博覧会に共通する性格であった。ちなみに、1981年に神戸で開催されたポートピアは、興行として盛り上がりただけでなく、山を削って海を陸地に変える「株式会社神戸市」といわれた都市開発手法の結晶でもあった。

博覧会の興行的成功に話を絞ると、1970年の大阪万博で記録された約6,400万人の来場者数は、2010年の上海万博が約7,400万人の記録で抜くまで、博覧会の歴史上、空前絶後の数字とみなされていた。その一方、1975年の沖縄海洋博の来場者数は約350万人に終わり、興行的には大失敗だったとみなされている（吉見 2005）。当時の沖縄がアメリカから返還されたばかりで、再び日本の領土となったことを国際的に認知させる目的があったことを考えると、まったく無駄になったわけではないが、興行的に反省の余地は大きい。特に高速道路を整備するため、あえて僻地に開催地を置いたことは率直に言って愚策であり、セオリー通り主要都市を結ぶものとして道路整備をはじめべきではなかっただろうか。なお、筑波科学博の来場者数は約2,000万人で、一見問題のない数字に見えるかもしれないが、この時の入場料は大人が2,700円に対し、子どもは800円で、子どもの来場者によって水増しして、興行的失敗を糊塗したと批判されている（吉見 2005）。

それらと比べると、2005年の愛知万博は性格を異にしている、「愛知だけ万博」という悪口があったように、約2,200万人の延べ来場者のかなりの部分が愛知県民だったといわれている（加藤ほか 2006）。国際的なインバウンド消費を呼び込むことに失敗し、日本国内でも存在感の薄い「国際」博覧会ではあったが、地元住人からは「すごく楽しかった」、「良かった」という声が多く聞こえている。2025年、三度大阪で万博を開催するにあたり、愛知万博が示した特異性は、1970年の万博しか知らない大阪の人々にとって、学ぶべきものが多いことをここで強調しておきたい。現在、2025年の来場者数目標は2,800万人となっているようだが、バブル景気の90年でも2,300万人程度だったことを思い出せば、筑波博のような水増しの悲劇を避ける目標の再設定が必要ではないだろうか。

万博の評価を考えるうえで、開催テーマは重要な手掛かりになるだろう。1970年のテーマが「人類の進歩と調和」だったことは周知と思われるが、それに加え、サブテーマが4つもあったことは、たいてい忘れられているようだ（日本万国博覧会協会 1970）。

- ① よりゆたかな生命の充実を
- ② よりみのりの多い自然の利用を
- ③ より好ましい生活の設計を
- ④ より深い相互の理解を

この4つのうち、「より実りの多い自然の利用を」という言葉は、特に高度経済成長期という時代を感じさせる。日本初のニュータウン計画として有名な千里ニュータウンの開発は、1960年代前半からはじまっていたものの、万博開催が決まる直前は停滞に陥っていた（吉見 2005）。万博開催を契機に、千里ニュータウンを起点として、いまでは大阪府内の交通網を支える柱となった近畿自動車道や中央環状道路の整備が進んだことは、自然保護の意識が高い現代の視点からは評価が難しいことだが、都市開発の真価を示しているのは否定できない事実である。

2025年の大阪・関西万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」がメインテーマとされている。また、サブテーマとして「多様で心身共に健康な生き方」と「持続可能な社会・経済システム」の提案が掲げられている。伝え聞くところでは、こうしたテーマになった原因は、大阪周辺に医薬品メーカーが多いので、その産業振興の話から万博開催の機運が生まれたことと関係しているようだ。とはいえ、最初は「健康と長寿」というテーマが考えられていたものの、高齢者に偏ったイメージを受けるとの批判があったので、もう少し前向きなテーマとして「いのち輝く未来社会のデザイン」が提案されたとも聞いている。テーマ決定の経緯はともかく、iPS細胞で有名な山中伸弥京大教授の協力も得られることで、イメージ的には未来社会の到来を感じることができるテーマと評価できるかもしれない。

そもそも、万博が成功するというのはどういうことか、人によって考え方が違えば評価も変わってくる。評価のためには、まず何を目的としているのかを確定する必要があるが、拙稿では最初にそれを5つに分類して定義しておいた。もっぱら興行的な成功と経済効果ばかりを強調するニュース報道に対しては、それとは違った次元で評価ができることを、ここで強調しておきたい。

たとえば、「いのち輝く未来社会のデザイン」がどういうものか、具体的に人々に周知され、その方向で見聞が広まることは、それだけでも万博開催の意味はあるといえよう。

また、開催地名の「大阪・関西」が世界に知られ、ブランドとなることも成功の一要素として捉えておく必要がある。

成功、失敗の基準として経済効果や都市開発を考えるなら、前回70年の大阪万博も今回も、

数年前にオリンピックが開催されていることを関連づける必要があるだろう。1964年の東京オリンピックでは、開会式の数日前に東海道新幹線が開通した。また、前回の東京オリンピックと大阪万博の間には、東名・名神の高速道路が作られた。大阪で、前回のオリンピック関連で作られた交通インフラを思い出せば、地下鉄・御堂筋線が64年に梅田から新大阪まで延伸されている。さらに新大阪から江坂までが、70年の万博に合わせて延伸され、同時に江坂から千里中央までの北大阪急行電鉄が新設されている。阪急電鉄千里線も、千里山で止まっていたものが、64年に南千里まで延伸され、70年の万博開催にあわせて北千里まで延伸されている。大阪の交通インフラは、オリンピックと万博の間に飛躍的に発展し、それまで郊外にはたいてい上下2車線道路しかなかった所に、上下4車線とか6車線道路が作られ、地域の発展に寄与したことは忘れることができない。

2005年の愛知万博でも、中部国際空港「セントレア」が、知多半島の先に人工島を作って建設された。それまでもっぱら道路網と海上交通に依存しがちだった愛知県で、24時間離着陸可能な空港ができたことは、産業発展の上で大きな影響があった。また、会場へのアクセス手段として、(超電導ではないが)磁気浮上式のリニアモーターカーが新設されている。(大阪でも、花博の時に地下鉄・鶴見緑地線(現在は延伸して「長堀鶴見緑地線」と改称)がリニアモーター式で建設されたが、こちらは車輪がついていて、動力だけリニアモーターで動いている。)さらに東海環状自動車道が、岐阜県から愛知県の豊田市まで作られ、東海圏に散在する自動車部品の工場を結ぶ交通インフラ整備に寄与したとされている。

2025年の大阪・関西万博では、会場のある夢洲へのアクセス鉄道として、地下鉄・中央線の延伸が計画されている。現在、中央線は咲洲にあるコスモスクエア駅が終点となっているが、すでに建設済みのトンネルをくぐって1駅分だけ伸ばせば、会場予定地までつながるといえる。夢洲での開催を前提とすれば、こちらは現実的な選択肢といえよう。その一方で、JR桜島線(ゆめ咲線)を延伸して、舞洲経由で夢洲へのアクセス鉄道をつなぎたいという声も上がっているが、将来的に需要を期待できるのか、慎重な対応を求めたい。万博開催の決定以降、それに便乗して様々な建設・開発計画が持ち上げられているが、そういうときこそ、海洋博や科学博の失敗を「他山の石」としなくてはならない。

日本の博覧会の歴史において、1970年の大阪万博と2005年の愛知万博は、前述のようにその成り立ちは大きく違いがあっても、それぞれ別の意味で成功したといわれてきた。その二つにあえて共通点を探してみると、どちらも事前には激しい反対運動があったことを指摘できるかもしれない。

まず1970年といえば70年の安保闘争があり、その前の68年には学園紛争があって、安易なイベント開催は許されない雰囲気があった。同時代の1969年に出た『われわれにとって万博とはなにか』という本では、当時の著名な建築家や芸術家によって、万博開催に反対する議論が大上段から展開されている(針生 1969)。その文中では、独占資本や国家権力への抵抗や打倒

が、知識人の常識的な目標として掲げられていた。

前回の大阪万博の遺産として、吹田市にある国立民族学博物館の設立を先にあげていたが、そのベースになったのは、京都大学の人類学者を中心とした人々が、当時としては破格の予算で世界中から様々な民族の生活用具や祭器を集めてきたことにある。この試みは、世界の多様な文化を日本の人々に知らしめるという、百科全書派的な企図になっていたわけだが、同時代の知識人には植民地主義の再来として厳しく批判されていた。

1970年の万博会場で示された未来都市のイメージにも、その批判は及んでいた。丹下健三を中心とした建築家たちは、開催テーマ「人類の進歩と調和」を象徴する建築物として「お祭り広場」という鉄骨組の空中都市を提案したが、その姿は今は残されていない。むしろ、「メタポリズム」と呼ばれた当時流行の建築思想に対して、内側から食い破るかのように建てられた「太陽の塔」だけしか現代に残っていないことは、前回の大阪万博をめぐる知的葛藤の軌跡を想起させるものと理解できる（平野 2009）。

丹下健三が示した未来都市の構想は、高度経済成長を背景として、住人がいくら増えようと、鉄骨組のテトラ構造を延長していけば、人が住める空間を無限に広げることができるという思想の下に作られていた。元来の計画では、これだけが開催テーマを象徴する建物として作られる予定だった。それに対し、太陽の塔を作った岡本太郎は、「人類の進歩と調和」という開催テーマそのものと格闘していた。人間は進歩なんかしていないし、ぶつかり合いのなかでしか調和は見いだせないと主張して、未来都市として造られた丹下の建築物に対して、太陽の塔を突きつけた。そういうぶつかり合いから、1970年の大阪万博のレガシーが残されている。また、万博開催に直接かかわった知識人だけではなく、1969年の夏には、ベトナム戦争に反対する運動を兼ねて「反戦のための万博」が市民によって開催されてもいる（吉見 2005）。そのように、反対が強かったからこそ、それを乗り越えるものを大阪万博にかかわる人は提案しなければならなかった。それと同じ運動と葛藤を2025年に向けて起こせるか否かが、次回の大阪・関西万博を成功に導けるかどうかの分水嶺となるだろう。

なお、丹下たちが提案した未来都市のイメージも、太陽の塔に一方的に敗北したわけではない。当時、万博会場のなかだけに仮設されていた建築物は、日本中に広がるビル群やマンション群として、実現されたということもできる。また、当時のもうひとつの未来予測として、「情報社会」の到来が予言されていたが、それが現在どこまで普及したかは、われわれが身に染みて知るところであろう。現代の日本で、都市のあちこちで映像モニターから投げかけられた光が氾濫する様は、大型スクリーンで映像作品を手を替え品を替え見せる日本の万博の十八番がストリートで具現化されたものと考えることができる。増殖する未来都市や身体に浸透する情報社会というもののイメージを教えてくれたという意味では、前回の大阪万博は成功だった。ことの成否は、そうした1970年の未来イメージを、2025年に乗り越えられるかどうかにかかっている。

2005年の愛知万博については、自然の叡智をテーマとしながら、最初の計画にニュータウン開発が組み込まれていた。海上の森（かいしょのもり）という、名古屋市周辺では例外的に自然が残っている森を切り開いて万博会場にし、その跡地を住宅開発するアイデアは、1970年の大阪万博をそのまま愛知でやろうとしたものといえよう。そういう初期の開催案に対して、21世紀にもなって森をつぶして団地を作ってどうするんだと、当然ながら時代錯誤との批判が寄せられた（町村・吉見 2005）。国内や地元だけではなく、BIEに初期案を持って行っても、厳しい意見を受けることになった。その結果、もともと運動公園になっていたところをメイン会場とし、海上の森は一部だけ切り開いて、メイン会場の運動公園からロープウエーでつないで、「自然の叡智」を垣間見て帰ってくるという会場案に変更されることになった。そこに至る経緯は必ずしも胸を張れるものではなく、地元の人々にとって残念ではあっても、愛知万博から地元に残されたものは必ずしも小さなものではなかった。愛知万博の開催当時、一時の賑やかしのようによく見られていた「サツキとメイの家」が、宮崎駿が発掘した日本の森林崇拜をリバイバルさせ、愛知万博のレガシーとなったことは、太陽の塔が保存されたことと似た展開を示している。さらに2019年には、愛知万博の会場跡に「サツキとメイの家」を核として「ジブリの森」が開設されることは、「自然の叡智」を掲げた愛知万博のレガシーが（商業主義の偏りはあっても）今も発展していることを示している。市民団体や自然保護団体が愛知万博を厳しく批判したことは、無駄ではなかった。開催当時、彼らが意図されたとおりにことが実現しなかったとしても、議論に参加した愛知県民や名古屋市民たちが、自分たちの発言から展開されたものを会場に見出すことができたからこそ、足しげく会場に通ったのだろう。当時、普及しはじめていた携帯経由のネット予約を使って、地域住民が参加・体験型のイベントを楽しんだ愛知万博のあり方（加藤ほか 2006）は、より進化したかたちで大阪でも実現したいものだ。

それを考えると、2025年に向けても、国や大阪市、大阪府の役人や、一部の知識人や財界人が勝手にやっている状態を放置することはできない。21世紀の万博は、地域住民がその企画に参加できる道を開けないのなら、開催する意味はない。特に愛知万博に見習うべきは、開催プランを検討する委員会に、万博開催に反対している人も入れた議論をしたところである（町村・吉見 2005）。

そういうことを踏まえて、来たる2025年の大阪・関西万博は、少なくとも開催地に多額の借金を残さないようにすべきであろう。1990年の、バブルの時代にやった花博の記憶は忘れて、少子高齢化を踏まえた現在の万博を構想しなければならない。2025年からさらに10年、20年、30年先の未来まで考えたときに、やるべきことを考える努力が求められている。

それに加え、そこには2025年以降の未来像を提案するものがなければならない。映像作品をただ受け身で見せるような、1970年型の万博のあり方は、もうとっくに消費期限が切れている。2005年の愛知万博のように、市民が参加できるイベントとして何ができるかを考えることが、大阪に住むわれわれに必要となるだろう。

2018年に、商学部の陶山計介教授を代表として「大阪ブランド」に関する調査を行ったことから、大阪に住む人にとって大阪のアイデンティティは「革新的な創造性」によってイメージされていることがわかった。大阪生まれの人間にとっても、正直これには意外な印象があるが、現代の大阪の住人は、革新的でありたいとか、創造的でありたいと思っていることは事実のようだ。2025年の大阪・関西万博では、地域住民が自ら考えたり、こうして行こうじゃないかという意見をみんなで出し合えるような、そうした民主的な知の集積を、ぜひとも展開したいものだ。

海外からの来場者に大阪ブランドをアピールするだけでなく、地域住民の「シビック・プライド」を喚起するような博覧会にできないか、ともすれば自虐的な大阪イメージを引き受けてしまいがちな性癖を脱して、新たな大阪、大阪人をイメージして良い時期が来ている。21世紀になっても、コテコテの大阪がどうかとっていないで、大阪起源の文楽やお笑いにしても、元々は都市ならではのハイブローな文化だったことを想起すべきだろう。文化を創造する力は今の大阪にもあるはずだし、これから未来に向けて新たなものを提案できるわれわれでありたい。2025年の大阪・関西万博は、そのきっかけを開くものにしたいたいものである。

参考資料

- フランク・ギブニー編（1994）『ブリタニカ国際大百科事典（第16巻）』TBSブリタニカ
針生一郎編（1969）『われわれにとって万博とはなにか』田畑書店
平野暁臣（2009）『岡本太郎―「太陽の塔」と最後の闘い』PHP研究所
本城靖久（1996）『トーマス・クックの旅―近代ツーリズムの誕生』講談社
加藤晴明・岡田朋之・小川明子編（2006）『私の愛した地球博―愛知万博2204万人の物語』リベルタ出版
町村敬志・吉見俊哉編（2005）『市民参加型社会とは―愛知万博計画過程と公共圏の再創造』有斐閣
日本万国博覧会協会（1970）『日本万国博覧会公式ガイド』東京出版販売
吉田光邦編（1986）『万国博覧会の研究』思文閣出版
吉見俊哉（1992）『博覧会の政治学―まなごしの近代』中央公論社
――（2005）『万博幻想：戦後政治の呪縛』筑摩書房
博覧会国際事務局（BIE）公式サイト <https://www.bie-paris.org/site/en/>（2018年12月26日閲覧）

本論文の一部は、2016年度～2018年度関西大学教育研究高度化促進費において、課題「大阪ブランドの研究―食・健康・安全―」として促進費を受け、その成果を公表するものである。